

腹腔鏡下結腸切除術の医療経済における問題点

星野誠一郎¹⁾ 内藤 雅康¹⁾ 榎 研二¹⁾
橋本 竜哉¹⁾ 中川 元道¹⁾ 山内 靖¹⁾
松尾 勝一¹⁾ 篠原 徹雄¹⁾ 乗富 智明¹⁾
志村 英生¹⁾ 山下 裕一¹⁾ 中川 朋子²⁾

1) 福岡大学消化器外科

2) 福岡大学病院看護部手術部

要旨：腹腔鏡手術が消化器外科領域に導入されその対象疾患も増加してきている。今回、腹腔鏡手術が医療経済的にどのような効果をもたらしているのかを結腸手術を対象に検討した。対症は当科で施行した開腹手術（A群）31例と腹腔鏡手術（B群）を行った7例である。手術時間、術中出血量においては両群間に差は無かったが、術中材料費は対手術総点数でA群11.2%の47,986円、B群は59.1%、323,166円によって手術における利益は、A群379,014円に対しB群は223,834円で差し引きA群が155,180円多いという結果であった。入院期間はA群27.2日、B群18.3日であり総入院料は1,347,679円と1,193,821円であった。1日あたりの入院料はA群49,570円、B群65,236円でB群の方が15,666円高かった。空床がなければ現時点の保険制度では両群間のもたらず手術利潤はほとんど変わらないという結果であった。今後、腹腔鏡手技を安定化し Disposable 製品の使用の定型化、低コスト化を計ることが必要と考えた。

キーワード：腹腔鏡下結腸切除術、医療経済、保険制度、Disposable 製品